

第2章 | 卒業生のみる大学教育の有用性と満足度

吉本圭一（九州大学）

1. 大学教育に対する卒業生の総合的満足度

1-1. 評価指標としての大学教育の有用性と満足度の把握について

大学教育に対する評価として、個々の、大学のカリキュラムや教育指導、学習環境、そして学生自身の学習へのエンゲージメントと学生生活経験など、大学生活の諸側面については第3章以下で検討するが、本章ではそれに先立ち、そうした教育の成果についての総合的な評価指標群を検討する。ここでは、特に大学教育の有用性と総合的満足度を取りあげる。

評価指標の検討においては、吉本（2004）で考察しているように、卒業後一定のキャリアを経験することで、学修成果の有用性を認識し、また適切に活用できるという「大学教育の遅効性」モデルを踏まえて、卒業生の初期キャリア形成段階での、中長期的な効用の検討が必要である。そこで、本章では、学修成果の有用性と総合的な満足度についての評価指標を提示するとともに、卒業後の経験年数との関連での傾向を検討しておきたい。

「大学教育の遅効性」については、吉本編（2010）でも、欧州諸国との対比の中で確認されており、「大学教育の効果は卒業直後ではなく、遅く現れる」という日本的な大学教育と初期キャリア形成の特色が明らかになっている。すなわち、学卒者の仕事における知識・技能の有用性は、要求される仕事のレベルによって左右され、卒後年数が長ければなるほど仕事の内容とレベルが上がり、在学中に獲得した知識・技能が適切に役に立つ機会が増え、有用性は高まるのである。

このような説明は、OJTやジョブローテーションを基盤にした人的資源開発や、大卒者の昇進は見込まれているがそのスピードが遅い、などの日本的なアプローチと整合している。しかし、このモデルが、大学以外の非大学型機関を含めた高等教育全体に適用しうるのかどうか、短期大学基準協会（2005）の傾向なども踏まえて、稲永・吉本（2013）は複数の卒業生調査をも検討した結果、短大・専門学校に関しては教育の遅効性モデルが適用しにくいこと、むしろ卒業時の教育の移行への適切性にも拘わらず、その後の初期キャリア形成の段階で否定的な評価に変わっているのではないかとの結論を示している。

また、1990年代後半からは、経済界における雇用三層化モデルの提言（日経連1995）において日本の経営の特徴であった長期継続雇用の範囲を限定していく方向性が示され、また現実に非正規雇用等が急速な拡大を示しており、他方で大学教育のユニバーサル化傾向も合わせて検討してみると、大学卒業生の雇用管理が企業によって、また企業単位でも一枚岩であるとは想定しにくい状況が広がっている。

本章では、大学教育の効果発現のプロセスやその場面として、以下の図2-1のモデルを設定し、卒業後の年数との関連での検討を行う。

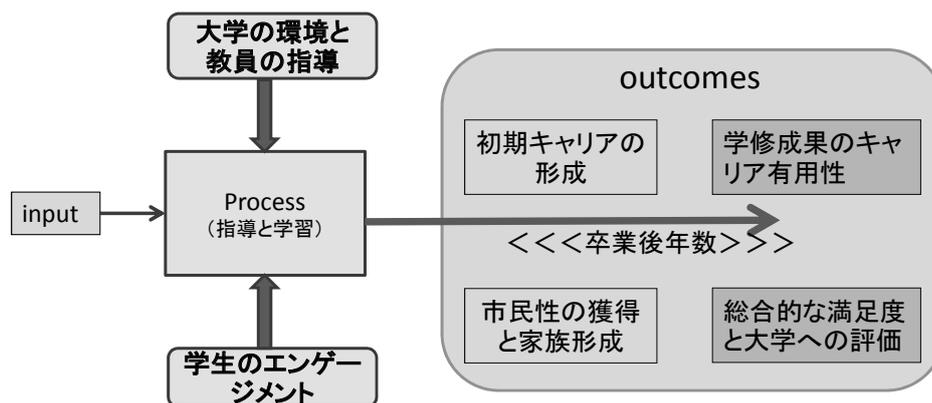


図2-1 第2章の要因枠組み

1-2. 総合的な満足度と専門分野間の差異

総合的に振り返って自校の満足度をみると、表2-1に示すように、多くの卒業生が5件法での満足度の高いほうから「5 とても満足している」が29.7%、「4」が38.7%であり、両者を合計すると68.4%が満足しているとみることができる。

これを専門分野別に見ると、「国家資格等（福祉・保育）」の卒業生の86.0%が満足していると回答している。次に満足度が高いのは、「国家資格（栄養・管理栄養）」の79.0%であり、この分野も国家資格等を目標として人材養成を行う学部である。「観光」や「人文・ビジネス」などと比較して、目的が明確な学部学科で学んだ学生が大学教育に満足しているとみることができるのかもしれない。

他方、「観光」は満足度が最も低く、卒業生の57.2%、6割弱しか満足と回答していない。「人文・ビジネス」も65.8%で国家資格系の学部・学科との開きが大きい。国家資格取得を目指す学部学科とそうでない学部学科の満足度の違いは明瞭である。なお、本調査での専門分野は極めて大括りであるため、「国家資格等（福祉・保育）」といっても、福祉学科や子ども心理学科など、個々の学科のもつ専門分野特性がどの程度影響しているのか、本サンプルの範囲で詳細な分析は難しい。本調査は参加機関相互による調査結果を用いたIRを引き続き実施しているため、各大学でのIR分析の中で分野の特性や学部学科の内容などを考慮した検討が課題となるであろう。量的データで得られた傾向は、<協働IR>の中で、他の指標等と突合させていく中で検討していくこととなる。

表2-1 大学教育の総合的な満足度（分野別）

(%)

	5 とても満足している	4	3	2	1 とても不満である	計	n
観光	28.6	28.6	31.0	11.9	0.0	100.0	42
人文・ビジネス	26.6	39.2	25.6	7.5	1.0	100.0	293
国家資格等（福祉・保育）	45.6	40.4	14.0	0.0	0.0	100.0	57
国家資格（栄養士・管理栄養士）	31.6	47.4	15.8	5.3	0.0	100.0	19
計	29.7	38.7	24.1	6.8	0.7	100.0	411

1-3. 卒年別にみる満足度の変化

大学教育の満足度の傾向を卒年別にみるために、表2-2では、卒業後の年数で3グループに分け、5件法の回答を機械的に1から5までの得点として平均スコアで示した。

表2-2 卒年別満足度の平均値（分野別）

		平均値	標準偏差	n
観光	卒後3年まで	4.13	0.81	16
	卒後4-6年	3.36	1.08	14
	卒後7-10年	3.64	1.12	11
	計	3.73	1.03	41
人文・ビジネス	卒後3年まで	3.90	0.92	136
	卒後4-6年	3.75	0.98	91
	卒後7-10年	3.76	0.93	63
	計	3.82	0.94	290
国家資格等（福祉・保育）	卒後3年まで	4.07	0.70	15
	卒後4-6年	4.61	0.50	18
	卒後7-10年	4.29	0.78	21
	計	4.33	0.70	54
国家資格（栄養士・管理栄養士）	卒後3年まで	3.86	0.69	7
	卒後4-6年	4.71	0.49	7
	卒後7-10年	3.25	0.96	4
	計	4.06	0.87	18
計	卒後3年まで	3.93	0.88	174
	卒後4-6年	3.88	1.00	130
	卒後7-10年	3.84	0.84	99
	計	3.89	0.94	403

「観光」と「人文・ビジネス」では卒業後3年目までの若年卒業生の方が、より年長の卒業生よりも大学教育に対し高い評価をする傾向が見られる。他方、「国家資格等（福祉・保育）」では、卒業後4年目をこえるより年長の卒業生の方が、若年卒業生より高い満足度となっている。なお、「国家資格（栄養・管理栄養）」についてはむしろ中間層が高いという点で、「国家資格等（福祉・保育）」と類似した傾向を示している。

これは、吉本（2010）のReflex日欧大卒者調査等で明らかにされてきた「大学教育の効用の通増傾向」、短大・専門学校調査で明らかになってきた「ガラスの天井」としての「効用の通減傾向」のいずれの先行研究の知見とも直接対応しておらず、これらの仮説で解釈することは難しい。国家資格系と非資格系の教育と労働市場でのキャリアの関係性の違いなど、分野の特徴を考慮すべきであるのかもしれない。

2. 18歳時点の進路選択を振り返っての機関と専門分野の評価

2-1. 18歳進路の再選択可能性としての母校と出身専門分野の評価

吉本（2007, 2010, 2011）に代表されるように、これまでの卒業生調査でも多く使われてきた「母校への愛着や評価」を測る設問として、「18歳時点の進路選択を振り返っての機関と専門分野の評価」がある。本調査でも、仮想的な設問として、18歳時点に戻り再度進路選択ができる場合、自校や現在の専門分野を選択するかと尋ねたところ、表2-3に示すように進学就職や学校種の選択に関して、「本学を選ぶ」という比率は、全体では54.5%と二人に一人は再度、当該大学を選択したいと回答していた。この回答から、一定の母校の教育やそこで獲得したものへの肯定的な評価があることがうかが

える。

他の志向性を見ると、「他の4年制大学」が48.0%と大きな割合を占めており、さらには「専門学校進学」が12.6%あった。専門学校を志向するということは、現在獲得している大学の学歴よりも短い学歴を希望していることになる。大学よりも短い学習期間の専門学校を選択すれば良かったということは、大学の学歴よりも他の希望が強かったことを示しているものと考えられる。大学教育に満足できなかったのか、職業教育の方が大学教育に勝ると考えているのか、回答者の理由をさらに検討する必要があるだろう。なお、他には「短大進学」希望は1.1%、「就職など」が5.6%であった。

表2-3 18歳時点での再進路選択の志向性（分野別） (複数回答, %)

	本学を選ぶ	他の四年制大学に進学	専門学校に進学	短期大学に進学	就職, 自営など仕事をしたい	その他	計	n
観光	50.0	44.4	18.5	3.7	11.1	3.7	100.0	54
人文・ビジネス	55.4	49.6	11.3	0.3	4.7	1.6	100.0	379
国家資格等（福祉・保育）	58.6	35.7	15.7	2.9	7.1	4.3	100.0	70
国家資格（栄養士・管理栄養士）	42.9	60.0	11.4	2.9	2.9	2.9	100.0	35
計	54.5	48.0	12.6	1.1	5.6	2.2	100.0	538

「本学を選ぶ」比率をさらに専門分野別に見ると、「国家資格等（福祉・保育）」が最も高く58.6%、続いて「人文・ビジネス」が55.4%である。逆に低いのは、同じく資格系の「国家資格（栄養・管理栄養）」で60.0%が「他の4年制大学」を希望している。ただし、専門分野というよりも、個別の大学の総合的な評価にかかる問題であるのかもしれない。

表2-4に示すように、同じく専門分野についてみると、むしろ「国家資格（栄養・管理栄養）」は同じ分野を希望しており、先の傾向と合わせて、同じ分野の他大学の方が良かったと評価する卒業生が多いことがわかる。これに対し、「観光」分野では、「今の仕事に対応した」他の専門分野18.4%、「今の仕事とも出身専攻とも異なる」他の専門分野30.6%と、半数近くが出身専攻分野以外を学びたいと回答している。先の設問においても「観光」は、専門学校希望者が一定数いたため、分野・学校ともに評価が高くない者が相当数いることが明らかになっている。

表2-4 18歳時点における進路再選択での専門分野に対する志向性（分野別） (%)

	本学で学んだのと同じ専門分野がよい	本学で学んだこととは違うが現在の仕事に合うような専門分野がよい	本学で学んだことや今の仕事とは関係しない別の専門分野がよい	よくわからない	計	n
観光	46.9	18.4	30.6	4.1	100.0	49
人文・ビジネス	48.4	16.4	28.8	6.3	100.0	347
国家資格等（福祉・保育）	50.0	21.9	25.0	3.1	100.0	64
国家資格（栄養士・管理栄養士）	57.1	5.7	31.4	5.7	100.0	35
計	49.1	16.6	28.7	5.7	100.0	495

2-2. 総合的な満足度と18歳での進路再選択可能性評価との関連

では、18歳時点での進路再選択に対する志向性と大学教育への満足度にはどのような傾向が見られるのだろうか。18歳時点の再帰的な進路選択の傾向と大学評価の満足度を示したものが表2-5である。

この結果を見ると、再帰的な進路選択可能性評価は、総合的な満足度と明瞭に対応していることは

分かる。すなわち、再度「本学を選択する」という学生は、総合的な満足度では「5とても満足している」が44.7%あり、または次の評定の「4」も同様であり、合計で89.4%と高い満足度になっていた。これに対し、「他の4年制大学」など他の進路を選択する場合においては、「5とても満足」の比率は20%以下にとどまっている。

表2-5 18歳時点の進路再選択と満足度

(%)

	5 とても満足している	4	3	2	1 とても不満である	計	n
本学を選ぶ	44.7	44.7	10.2	0.5	0.0	100.0	215
他の四年制大学に進学	16.4	37.0	34.9	10.1	1.6	100.0	189
専門学校に進学	14.8	42.6	29.6	13.0	0.0	100.0	54
短期大学に進学	20.0	80.0	0.0	0.0	0.0	100.0	5
就職、自営など仕事をしたい	17.4	47.8	21.7	13.0	0.0	100.0	23
その他	20.0	40.0	40.0	0.0	0.0	100.0	5

3. 大学教育の効用の諸側面

3-1. 大学教育の職業・キャリアにかかる効用

卒業生は、大学教育が職業や将来のキャリアを展望する上で、どの程度役立ったと考えているのだろうか。職業・キャリアに対する大学教育の効用を分野別に示したのが、表2-6である。

表2-6 職業・キャリアに対する大学教育の効用（分野別）

		就職先を見つける上で	仕事に必要な基礎を身につける上で	仕事で必要な学習を続けていく上で	将来のキャリアを展望する上で	人格を形成していく上で
観光	平均値	3.69	3.60	3.46	3.65	3.87
	標準偏差	1.13	1.03	0.95	1.00	1.04
	n	54	55	54	55	55
人文・ビジネス	平均値	3.44	3.32	3.22	3.31	3.84
	標準偏差	1.26	1.19	1.15	1.15	1.04
	n	381	377	378	378	380
国家資格等（福祉・保育）	平均値	3.94	4.08	3.94	3.82	4.06
	標準偏差	1.07	0.98	1.04	0.97	0.82
	n	72	72	71	72	72
国家資格（栄養士・管理栄養士）	平均値	3.95	4.46	4.27	3.84	4.03
	標準偏差	1.27	0.87	1.10	1.19	0.93
	n	37	37	37	37	37
計	平均値	3.57	3.53	3.41	3.45	3.88
	標準偏差	1.24	1.18	1.16	1.13	1.01
	n	544	541	540	542	544

職業・キャリアに関わる大学教育の効用観を専門分野別に比べると、どの側面についても、「国家資格（栄養・管理栄養）」が大学教育の効用をもっとも高く評価していた。次いで、「国家資格等（福祉・保育）」が高い評価となっていた。これに対して、「人文・ビジネス」がもっとも低く、「観光」も同様の低さとなっている。国家資格系の学部学科は、職業やキャリアを展望する上で、大学時の教育を有

用と捉えているが、非資格系の学部学科の学生は、職業やキャリア展望に大学教育が有用と捉えていなかった。国家資格系の学部学科には、職場や現場での実習がカリキュラムに組み込まれていることも影響しているのだろうか。

また、表2-7に示すように、卒業年数による差異を見てみると、大学教育の長期的な効用の逡増傾向は見られなかった。「就職先を見つける上で」の項目では、一部の分野では「卒業4-6年」の方が効用感が高いなどの例外はあるものの、多くの側面で、卒業直後の方が評価が高い傾向があり、むしろ効用の逡減傾向がみられた。

表2-7 職業・キャリアに対する大学教育の効用（卒年別）

			就職先を 見つける上で	仕事に必要な 基礎を身に つける上で	仕事に必要な 学習を続けて いく上で	将来の キャリアを 展望する上で	人格を形成 していく上で
観光	卒後3年まで	平均値	3.77	3.95	3.76	3.95	4.05
		標準偏差	1.07	0.84	0.89	1.00	0.95
		<i>n</i>	22	22	21	22	22
	卒後4-6年	平均値	3.76	3.35	3.41	3.41	3.88
		標準偏差	1.25	1.17	0.94	0.80	1.05
		<i>n</i>	17	17	17	17	17
	卒後7-10年	平均値	3.36	3.40	3.13	3.47	3.60
		標準偏差	1.08	1.06	0.99	1.19	1.18
		<i>n</i>	14	15	15	15	15
	計	平均値	3.66	3.61	3.47	3.65	3.87
		標準偏差	1.13	1.04	0.95	1.01	1.05
		<i>n</i>	53	54	53	54	54
人文・ビジネス	卒後3年まで	平均値	3.57	3.45	3.29	3.49	3.93
		標準偏差	1.17	1.13	1.13	1.08	0.99
		<i>n</i>	176	174	175	175	175
	卒後4-6年	平均値	3.50	3.26	3.18	3.21	3.79
		標準偏差	1.29	1.25	1.19	1.18	1.06
		<i>n</i>	121	120	119	119	121
	卒後7-10年	平均値	3.04	3.16	3.14	3.05	3.68
		標準偏差	1.35	1.19	1.10	1.17	1.09
		<i>n</i>	81	80	81	81	81
	計	平均値	3.44	3.33	3.22	3.30	3.83
		標準偏差	1.26	1.18	1.14	1.14	1.04
		<i>n</i>	378	374	375	375	377
国家資格等（福祉・保育）	卒後3年まで	平均値	3.84	4.21	4.05	4.00	4.21
		標準偏差	0.96	0.86	0.91	0.94	0.71
		<i>n</i>	19	19	19	19	19
	卒後4-6年	平均値	4.09	4.17	4.13	3.87	4.22
		標準偏差	1.08	1.11	1.18	1.14	0.80
		<i>n</i>	23	23	23	23	23
	卒後7-10年	平均値	3.96	4.00	3.79	3.68	3.84
		標準偏差	1.17	1.00	1.06	0.90	0.94
		<i>n</i>	25	25	24	25	25
	計	平均値	3.97	4.12	3.98	3.84	4.07
		標準偏差	1.07	0.99	1.06	0.99	0.84
		<i>n</i>	67	67	66	67	67

			就職先を 見つける上で	仕事に必要な 基礎を身に つける上で	仕事に必要な 学習を続けて いく上で	将来の キャリアを 展望する上で	人格を形成 していく上で
国家資格（栄養士・管理栄養士）	卒後3年まで	平均値	3.71	4.57	4.57	4.07	4.00
		標準偏差	1.59	0.85	1.09	1.27	0.96
		<i>n</i>	14	14	14	14	14
	卒後4-6年	平均値	4.29	4.53	4.18	3.82	4.24
		標準偏差	1.05	0.87	1.19	1.19	0.90
		<i>n</i>	17	17	17	17	17
	卒後7-10年	平均値	3.60	4.00	3.80	3.40	3.40
		標準偏差	0.89	1.00	0.84	1.14	0.89
		<i>n</i>	5	5	5	5	5
	計	平均値	3.97	4.47	4.28	3.86	4.03
		標準偏差	1.28	0.88	1.11	1.20	0.94
		<i>n</i>	36	36	36	36	36
計	卒後3年まで	平均値	3.62	3.63	3.47	3.61	3.97
		標準偏差	1.17	1.12	1.15	1.09	0.96
		<i>n</i>	231	229	229	230	230
	卒後4-6年	平均値	3.68	3.51	3.42	3.38	3.90
		標準偏差	1.26	1.27	1.23	1.16	1.03
		<i>n</i>	178	177	176	176	178
	卒後7-10年	平均値	3.28	3.39	3.29	3.24	3.69
		標準偏差	1.31	1.17	1.10	1.14	1.06
		<i>n</i>	125	125	125	126	126
	計	平均値	3.56	3.53	3.41	3.44	3.88
		標準偏差	1.24	1.18	1.16	1.14	1.01
		<i>n</i>	534	531	530	532	534

3-2. 総合的な満足度とそれぞれの効用観との関係

大学教育はどのような側面で評価されているのだろうか。総合的な満足度と各側面での効用観を相関係数で示したのが表2-8である。

この結果をみると、いずれの側面でも、効用観の高さと満足度とは強い優位な相関がみられた。特に「将来のキャリアを展望する上で」大学の効用を感じている者ほど、総合的に母校の教育に満足していることがわかる（.522）。その「将来展望」と比べた場合に、「仕事に必要な学習を続けていく上での効用」という観点は、満足度との関連が相対的に低いとも言える（.418）。

また、18歳時点の進路再選択についても、「本学を選ぶ」と回答した者は満足度が高い（.492）。それに対し、「他の四年制大学に進学」を希望した者は満足度が最も低くなっている（-.329）。

表2-8 総合的な満足度と効用感との関係

	就職先を 見つける上で	仕事に必要な 基礎を身に つける上で	仕事で一人前 になる上で	仕事に必要な 学習を続けて いく上で	将来の キャリアを 展望する上で	本学を選ぶ	他の四年制 大学に進学	専門学校に 進学
Pearsonの相関係数	0.437**	0.432**	0.420**	0.418**	0.522**	0.492**	-0.329**	-0.128**
有意確立（両側）	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.010
<i>n</i>	409	407	406	409	409	411	411	411

〈参考文献〉

- 稲永由紀・吉本圭一（2013）「高等教育修了者の初期キャリアにおける仕事と教育の有用性－大学と非大学型高等教育機関との比較を通して－」『短期高等教育研究』vol.3, 1-8頁
- 短期大学基準協会（2005）『短大卒業生の進路・キャリアと短大評価』
- 日本経営者団体連盟（1995）『新時代の「日本的経営」』
- 吉本圭一（2004）「高等教育と人材育成－「30歳社会的成人」と「大学教育の遅効性」－」, 高等教育研究所紀要『高等教育研究紀要』第19集, 245-261頁
- 吉本圭一（2007）「卒業生を通じた「教育の成果」の点検・評価方法の研究」大学評価・学位授与機構『大学評価・学位研究』第5号, 75-107頁
- 吉本圭一編（2010）『柔軟性と専門性－大学の人材養成課題の日欧比較－』高等教育研究叢書, 第109号, 広島大学高等教育研究開発センター
- 吉本圭一（2011）「短大教育における総合評価」, 小方直幸編『大学から社会へ』玉川大学出版部, 353-367頁